

知るまとはまる

姫路城 トリビア

Part 2





はじめに

世界各地から訪れる観光客を虜にする姫路城。昭和26年（1951）に国宝に指定され、平成5年（1993）には奈良の法隆寺とともに、日本で初の世界文化遺産となりました。

将軍・徳川家康の娘婿、池田輝政が8年の歳月をかけて慶長14年（1609）に完成させた現在の城。以来一度も戦火にまみえることなく、内曲輪の城郭がほぼ完全な形で残っています。連立式天守の複雑な構成美は希少な文化遺産であり、また、城を舞台に語り継がれる人物や物語も数多く、人々を魅了しています。

世界文化遺産登録20周年を記念し、作成いたしました「姫路城トリビアン」。姫路城内でガイドを行っている団体や姫路城に関わりの深い方々のご協力のもと、第2弾が完成いたしました。今回は、城の歴史や伝説、ゆかりの人物を主な内容にまとめています。

また、平成26年（2014）1月から放送される「軍師官兵衛」にちなみ、姫路城生まれの黒田官兵衛にまつわる項目も盛り込んでいます。

これを機に、多くの皆様が姫路城に関心を持っていただき、「世界の宝」を保存・伝承するきっかけになればと願っています。

【トリビアンとは・・・雑学的な知識をあらわす「トリビア」と、素晴らしいを意味する「トレビアン」をつなげた造語です】





しるまるはまる 姫路城トリビアン

はじめに
目次
姫路城マップ

● 官兵衛が「普請」を命じられた秀吉の姫路城	1
● 城の東方向が大手だった？秀吉の姫路城	2
● 秀吉の天下取りの根城となった姫路城	3
● 十字紋の瓦はキリシタンだった官兵衛が……？	4
● 官兵衛と鋳物師・芥田氏との深イイ話	5
● 千姫が生涯で最も幸せだった姫路城での日々	6
● 千姫が西の丸で守り育てた豊臣秀頼の娘	7
● 千姫を和ませた？「菱ノ門」のヒミツ	8
● 風流大名・榊原政岑が身請けした高尾太夫	9
● 異彩を放った茶人酒井宗雅と画家抱一	10
● 多忙だった国元のお殿様―「玄武日記」より	11
● 一枚、二枚、三枚……伝説の「播州皿屋敷」	12
● 実は他の場所にもあった？移動する「お菊井戸」	13
● あの宮本武蔵が退治した天守の妖怪	14
● 領民の怨念？妖怪に悩まされた輝政	15
● 姫路城下の実話をもとに…お夏と清十郎	16
● 昭和の大修理で棟梁が遭遇した人魂	17
● 本当にあったの？お殿様専用の抜け道	18
● これも抜け穴？ヒミツの「るノ門」	19
● 「腹切丸」で本当に切腹をしていたの？	20
● なぜか口を閉じている大天守の鯨たち	21
● 後で補強された「ちょっと変な石垣」	22
● 籠城物資を集めていた北腰曲輪	23
● 敵の目を欺く「水ノ一門」から「水ノ三門」の下り坂	24
● 「姫山原始林」樹木にも戦略的な意図が	25
● 鬼門の石垣にはこんな不思議が……	26
● 上山里曲輪で発見！狭間のない土堀	27
● 大正元年、姫路城が初めて一般公開に	28
● 奉祝行事に電飾で飾られた姫路城	29
● 数々の映画やドラマのロケ地になった姫路城	30
● 今の大手門（桜門）は実は昭和13年の作	31
● 今とは様子が違った戦中戦後の内濠	32



しるまるひめ
官兵衛バージョン

- ① 大手門
- ② るノ門
- ③ 菱ノ門^{ひし}東方土塀
- ④ 菱ノ門
- ⑤ いノ門
- ⑥ カの櫓^{やぐら}
- ⑦ ワの櫓
- ⑧ レの渡櫓^{わたりやぐら}
- ⑨ ヲの櫓
- ⑩ タの渡櫓
- ⑪ ルの櫓
- ⑫ ヨの渡櫓
- ⑬ ヌの櫓
- ⑭ カの渡櫓
- ⑮ 化粧櫓^{けしょうやぐら}
- ⑯ ろノ門
- ⑰ はノ門
- ⑱ にノ門
- ⑲ ほノ門
- ⑳ 水ノ一門
- ㉑ 水ノ二門
- ㉒ 水ノ三門
- ㉓ 水ノ四門
- ㉔ 水ノ五門
- ㉕ 水ノ六門
- ㉖ 西小天守^{しょうてん しゅ}
- ㉗ 乾小天守^{いぬい}
- ㉘ イの渡櫓
- ㉙ 口の渡櫓
- ㉚ ハの渡櫓
- ㉛ 二の渡櫓
- ㉜ 大天守^{だいてん しゅ}
- ㉝ 木の櫓
- ㉞ への渡櫓
- ㉟ とノ一門
- ㊱ 帯の櫓^{おび}
- ㊲ 帯郭櫓^{たいかくやぐら}
- ㊳ 太鼓櫓
- ㊴ りノ門
- ㊵ めノ門





姫路城
トリビアン

姫路城マップ





1. 官兵衛が「普請」を命じられた秀吉の姫路城



上山里曲輪下段

池田輝政が築いた現在の姫路城の前に、羽柴秀吉が築城した三重の天守を持つ姫路城がありました。秀吉が黒田官兵衛に宛てた書状「黒田家文書（福岡市博物館所蔵）」によると、秀吉は築城にあたって最も頼りと

する重臣で、地域の事情に精通している官兵衛に普請（土木工事）を命じており、後に築城家としても名を残す官兵衛の知略が城の縄張りに生かされたと考えられますが、その後、輝政が新たに城を築いたため、秀吉時代の遺構はあまり残っていません。

ただ、現在の本丸、二の丸、備前丸、上山里、東帯郭や井郭櫓など姫山の縄張りは、輝政以前の秀吉・羽柴秀長・木下家定が城主だった時代にその基礎が築かれていたのではないかと考えられており、それを裏付けるのが古式石垣と呼ばれる江戸時代以前の石積みが残っていることです。大きさや形の異なる自然の石をそのまま加工しないで積んでいく「野面積み」という積み方で、上山里曲輪下段、北腰曲輪、西北腰曲輪、乾曲輪などに見られ、菱の門東方土堀下に見られる要所に巨石を配する巨石積石垣も含め、秀吉から家定時代の石垣だと考えられています。



乾曲輪北

2. 城の東方向が大手だった？秀吉の姫路城

池田輝政が築いた現在の姫路城の大手（正面）は大手門（桜門）がある城の南側で、城の東側にある喜斎門（美術館の南側）が搦手（からめて）になっています。喜斎門を入ると少し西寄りに入城口があり、「とノ四門」、「とノ二門」から「とノ一門」（総素木造りの城門。古風な作りで、羽柴秀吉が姫路城築城の際、赤松氏の居城である置塩城から移したのではないかともしわれている）を通して本丸に入り、天守に向かうようになっています。

昭和の大修理の際の調査で、秀吉時代の天守が今の姫路城の天守とほぼ同じ位置にあったことがわかっており、秀吉の姫路城は天守から最短距離にある「とノ一門」を東へ下り、喜斎門から東または南東方向を大手としていたのではないかと推測されています。

秀吉としてはまだ平定して間もない但馬（生野銀山などがある）への道を重視し、この方角に向かって大手を開き、侍屋敷を置き、道沿いに竹田町、生野町といった但馬からの移住者にも町を作らせ、初期形態の城下町を形成していったのではないかと思います。





3. 秀吉の天下取りの根城となった姫路城

天正9年(1581)に姫路城を完成させた羽柴秀吉は、翌年、毛利氏を討つべく備中(岡山県西部)に進撃。高松城を囲み、堤防を築いて川の水を引き入れ、城を水没させるといふ黒田官兵衛の水攻め策を用いて城を落城寸前まで追い詰めますが、そこに本能寺の変。主君織田信長が明智光秀に討たれるというしらせに茫然自失となる秀吉ですが、官兵衛の「殿、お嘆きなのはわかりますが、今こそ天下をお取りになる絶好の機会ですぞ」との進言を受け、直ちに毛利方と和睦。光秀を討つべく、後に「中国大返し」と呼ばれる大強行軍で弔い合戦に向かいます。

その途中、姫路城に入った秀吉は、光秀討伐の軍略を練り、金奉行を呼んで城内にあった米や金銀をすべて兵たちに分け与えるよう命じ、士気を高めました。

丸1日の休養の後、同日深夜に再び進軍を開始し、山崎の合戦で光秀を討ち、天下を大きく引き寄せたのでした。

いわば姫路城が秀吉の天下取りの根城となったもので、平成26年(2014)の大河ドラマ「軍師官兵衛」でも姫路城で軍略を練る秀吉と官兵衛の姿が映し出されるかもしれません。



4. 十字紋の瓦はキリシタンだった官兵衛が……？

「姫路城トリビアン part1」でも、秀吉の前に黒田官兵衛の祖父重隆と父職隆が姫路城を築いたこと、官兵衛も姫路城で生まれ、後に城主になったことを紹介しましたが、現在の姫路城の「にノ門櫓」に十字の紋様を入れた鬼瓦があり、これを十字架と見なして、キリシタンであった官兵衛ゆかりの瓦ではないかといった説もありました。



確かに官兵衛は天正11年（1583）頃にキリスト教に入信し、シメオンという洗礼名も持っていますが、官兵衛はそれより前の天正8年に秀吉から播州揖東郡などで1万石を与えられ、篠の丸城（現宍粟市）の城主となって姫路城を離れています。秀吉が新たな姫路城を築いたのも天正9年のことで、話としては面白いものの、官兵衛とこの十字紋の鬼瓦を結びつけるにはいささか無理があるようです。

こうした十字紋は寺院の瓦に刻まれていることもあり、書写山円教寺にもその例があるようです。



円教寺出土瓦拓本





5. 官兵衛と鋳物師・芥田氏との深い話

播磨では古くから鋳物業が発達し、姫路城北東の野里に多くの鋳物師が住み着いていました。その棟梁が芥田五郎右衛門で、彼らが作る播磨鍋は名産品として天下に知られ、秀吉からは朝鮮の役に使う大鉄砲の注文を受けたりもしていました。

大坂冬の陣・夏の陣のきっかけとなった京都・方広寺の梵鐘（豊臣秀頼が再興を進めていた大仏殿の梵鐘に「国家安康」「君臣豊楽」の文言が刻まれていて、徳川家康が自分の名を分断して呪い、豊臣家の繁栄を祈願するものだと言われ、難癖をつけた）を鋳造するにあたり、五郎右衛門に率いられた鋳物師たちも携わりました。

その五郎右衛門に官兵衛が送った書状が残っています。鋳20丁と風炉30丁の注文を打診する内容で、この当時官兵衛は息子長政の居城のある筑前福岡にいましたが、姫路にいた頃から親交のあった五郎右衛門に対し、「池田輝政が新しく播磨五十二万石に封ぜられ、姫路が一国の中心地になり、五郎右衛門にとっても幸せなことだ」と言い添えるなど、官兵衛の古里姫路への尽きせぬ想い、相手を思いやる心遣いの細やかさがうかがえます。



6. 千姫が生涯で最も幸せだった姫路城での日々



化粧櫓

千姫は慶長^{けいちょう}2年（1597）に徳川^{ひでただ}秀忠と正室お江^{さう}の長女として誕生。わずか7歳で豊臣^{ひでより}秀頼に嫁ぎ、その後、大坂夏の陣で祖父家康の命令で落城する大坂城から救出され、元和^{げんな}2年（1616）に桑名城主本多忠政^{くわな}の嫡男・忠刻^{ただとき}と再婚。翌

3年、本多家の姫路移封に伴い、姫路城に移り住みます。

大坂の陣で心に深い傷を負った千姫に対する本多家の気遣いには並々ならぬものがあり、忠政は千姫の化粧料^{けししょう}10万石を使って西の丸を整備し、忠刻の居館・中書丸や千姫のための化粧櫓^{やくら}を造営し、三の丸にも千姫のための武蔵野御殿^{むさしの}を建て、庭園に泉水を設けて松や萩^{はぎ}などを植栽するなど心を配りました。

「まるで夫婦雛^{めうふひな}のよう」といわれた夫忠刻とも仲睦まじく、元和4年には勝姫が、翌5年には幸千代が生まれ、千姫は家族や家中の愛に包まれて幸せな日々を送ります。

しかし、元和7年（1621）幸千代が3歳で病死。その後、世継ぎに恵まれず、5年後の寛永^{かんえい}3年（1626）には忠刻までが没し、千姫は姫路城での幸せな日々を思い返しながらか勝姫とともに姫路を去り行くのでした。





7. 千姫が西の丸で守り育てた豊臣秀頼の娘

慶長20年（1615）の大坂落城のとき、豊臣秀頼と千姫の間には子どもはいませんでした。秀頼と側室の間には2人の子どもがいましたが、8歳だった男の子の国松は徳川方によって即処刑されました。7歳の女の子（俗名は不明）は千姫が助命を嘆願。徳川方による暗殺から守るために自らの養女として引き取り、本多忠刻に再嫁したときも密かに姫路城に連れて行き、西の丸の長局に一室を与え、養育したと伝えられています。

その後、女の子は鎌倉の尼寺東慶寺に入り、天秀尼と称しますが、入寺に際して家康に「女人擁護の寺法」（縁切り寺法。この寺に駆け込んで3年間仏道の修行をすれば夫との離縁が許される）の永続を願い出て認められ、江戸時代を通じて東慶寺は駆け込み寺として、夫との離縁を願う多くの女性たちのよりどころになりました。

やがて天秀尼は東慶寺の二十世住持となり、37歳の若さで他界するまで寺を守り抜きますが、尼となって天樹院と名乗っていた千姫も仏殿を建立するなど、陰になり日向になり天秀尼と東慶寺のために尽力したといえます。



8. 千姫を和ませた？「菱ノ門」のヒミツ

姫路城は美しさと防火への備えから白漆喰^{しろしつくい}総塗籠造^{そうぬりこぞう}になっていますが、総素木造りの「とノー門」のほか、「菱ノ門」の西面も、素木造りの木連れ格子^{きつれこうし}になっていて破風^{はふう}や懸魚^{げぎょ}も木地を露出^{ろしゅつ}しています。

東面が白漆喰塗になっているのに、西面だけなぜという疑問が浮かんできますが、この「菱ノ門」の西面をよく目にするのは西の丸に滞在することが多かった千姫。夫忠刻や家中の者たちが、大坂落城という大きな悲劇の後で本多家に再嫁してきた千姫の心をいたわり、和ませたかったのではという解釈も生まれます。

「菱ノ門」は冠木^{かぶき}に木製の花菱が飾られているのが名前の由来。中央に黒漆、飾金具付の格子窓^{こうしきど}、両側に同じく華頭窓^{かとう}、その東側には白漆喰^{ひさし}の庇付^での出格子窓が並ぶ華麗な門で、現存の門では唯一、櫓部分の柱、長押、舟肘木^{ふなひじき}などをそのまま現し、美しさを一層際立たせています。まさしく桃山様式の優雅さを今に伝える門で、牡丹^{ぼたん}の花のように艶やかだったという千姫にピッタリとくる門です。





9. 風流大名・榊原政岑が身請けした高尾太夫

享保17年(1732)、ちょうど徳川吉宗が將軍の時代に姫路城主になった榊原政岑。元は旗本の次男坊で、政邦の後に城主となった従兄弟の政祐が急死したため、18歳で家督を継いで15万石の大名になったというシンデレラボーイです。

旗本の次男坊として育ったため奔放な性格で、将棋に秀で、書をよくし、能楽や三弦、浄瑠璃などの芸能が好きな風流人。享保の改革で儉約を推し進め、万事に堅苦しい徳川吉宗への反発があったのか、江戸新吉原の遊女高尾を2500両の大金で身請けし、遊女総揚げの派手な披露目を行い、江戸中の話題をさらいました。

政岑とともに姫路に入った高尾は、姫路城の西御屋敷に住み、「西の方様」と呼ばれましたが、その後も政岑のぜいたくはとどまらず、吉宗の怒りを買って隠居謹慎を命じられ、榊原家は越後高田へと転封になります。在国中の政岑は、武士しか参拝できなかった城の守り神・長壁神社の御神璽を城下にうつし、夏祭りに領民も浴衣姿で参加できるようにしました。これが現在も続く「ゆかたまつり」のルーツだといわれています。



長壁神社

10. 異彩を放った茶人酒井宗雅と画家抱一

酒井宗雅^{そうが}こと忠以^{ただぎね}と抱一^{ほういつ}こと忠因^{ただなお}の兄弟は、酒井家の初代姫路城主忠恭^{ただずみ}の孫で、江戸に生まれ、酒井家の江戸屋敷に集う文化人たちの影響を受けて育ちました。

このうち兄の忠以は、忠恭の後を継いで安永元年^{あんえい}（1772）に18歳で姫路城主になります。絵画に秀で、和歌、俳諧^{はいかい}、能、作刀など多芸の人で、特に茶の湯は松江藩主松平不昧^{ふまい}（治郷^{はるさと}）に師事。「宗雅」と号し、多くの名品茶器を収集するだけでなく自ら茶器を作るなど、文字通りの風流大名でした。

一方、弟の忠因は若い頃から俳句、和歌、書、茶道など諸芸^{しよげん}に非凡の才を見せ、当初は忠以の跡継ぎに決まっていたましたが、忠以に子供が生まれると廃嫡^{あとうつ}となり、そのショックのためか出家し、浮世絵^{うきえ}などにも手を染めます。江戸の下町に居を構え、好きな絵に没頭^{ぼつとう}する風流三昧の生活をスタートさせます。

絵画では画号を「抱一」と称し、尾形光琳^{おがたこうりん}の画風に傾倒^{けいとう}。自ら後継者と位置づけ、江戸琳派と呼ばれる新しい流派を創始し、有名な「夏秋草図屏風」を初め数多くの名画を生み出しました。



酒井忠以作 脇指





11. 多忙だった国元のお殿様―「玄武日記」より

江戸時代の大名は原則として1年交代で江戸と領地に住むことが義務づけられていました。こうした中で天明元年（1781）、姫路城主酒井忠以は江戸の勤めを終えて姫路に戻りますが、その後の約半年の姫路滞在の記録が忠以自筆の「玄武日記」として残っています。

日記によると、10月7日に姫路城に戻った忠以がまず行ったのが長壁神社・総社の参拝と城下の侍屋敷の巡見。これは城主が姫路に戻ったときに欠かせない公式行事で、この年も9日から11日に城内（内曲輪、中曲輪、野里門外）を、12・13日に城外（外曲輪東部と南部）廻りを行っています。

毎月決まった日に定期的に行う行事が多いのも特徴で、先祖の霊をまつる即是堂の月5回の拝礼のほか、月並礼、唐鑑講義、槍稽古、柔稽古、居合稽古などの指定日が置かれています。これ以外に節分、初午といった年中行事をこなし、指定日以外は鷹野（鷹狩り）や御鍛冶小屋（自ら刀剣の焼刃を行う）に出かけたり、能や茶を嗜むなど、実に多忙な日々を送っていたようです。



玄武日記

12. 一枚、二枚、三枚……伝説の「播州皿屋敷」

江戸後期に広まった『播州皿屋敷実録』によれば、永正の頃（1505年前後）、姫路城主小寺則職のりもと しつけんの執権であつた青山鉄山あへん てつざんがお家乗っ取りをはかつていたので、それを察知した則職の忠臣衣笠元信きぬがさもと のぶは愛妾お菊を鉄山屋敷に住み込ませます。

そしてお菊は、鉄山が増位山ますいで花見の宴を開き、毒入りの料理で則職を殺す計画を立てていることを探り出し、元信に通報。元信は花見の席に切り込んで則職を救出します。

一方のお菊は鉄山に奪われた姫路城に残って、元信のために内情を探り続けますが、鉄山の家来の町坪弾四郎ちやうのつぼ だん しろうに感づかれてしまいます。ところが、かねてよりお菊に思いを寄せていた弾四郎は「黙だまっていてやる代わりに私の女になれ」と言いましたが、お菊は

断固これを拒否。すると立腹した弾四郎はお菊が預かるように命じられていた10枚組の家宝かほうの皿の1枚を隠し、罪をお菊になすりつけ、お菊を切り殺して古井戸に投げ込んでしまいます。以来、井戸からは、毎夜「一枚、二枚…」とすすり泣きながら皿を数えるお菊の悲しげな声が聞こえるようになったという話です。



姫路城内にある「お菊井戸」



13. 実は他の場所にもあった？移動する「お菊井戸」

この播州皿屋敷の物語は浄瑠璃^{じょうるり}に仕立てられ、寛保6年（1741）難波・豊竹座^{なんば とよたけざ}で初演されて以来、当時の浄瑠璃ブームの波に乗って全国津々浦々に広まり、あまりにも有名になったせいか、江戸番町が舞台の「番町皿屋敷」を初め全国各地に相次いで皿屋敷伝説が生まれました。

その伝説の「お菊井戸」。城内の上山里曲輪にある井戸がそれと伝えられています。井戸には水が無く、抜け穴ではないかといわれたこともありましたが、某テレビ局が取材で中に入ったところ抜け穴はなく、もともと釣瓶取り^{つるべ}の井戸と呼ばれる井戸だったことがわかりました。

また、上山里曲輪以外にも「お菊井戸」と伝えられた井戸があったようで、酒井家が藩主の時代は、現在の県立姫路東高校と姫路医療センター（旧国立姫路病院）の東側にあった桐の馬場の井戸が、明治の初め頃には十二所神社境内にある井戸が「お菊井戸」といわれていたそうです。



酒井家旧蔵「姫路侍屋敷図」の桐の馬場

14. あの宮本武蔵が退治した天守の妖怪

木下家定が城主の時代、姫路に立ち寄った宮本武蔵は名を滝本又三郎と変え、天守を警護する足輕組に奉公していました。

その頃、天守に妖怪が出るという噂があり、他の足輕は夜の警護を気味悪がっていましたが、又三郎だけは平気で勤め、噂を聞いた家老は又三郎が宮本武蔵だと見抜き、城主が直々に妖怪退治を命じました。

そしてある夜、武蔵がガン灯一つを持って天守に登り、3階の階段に差し掛かると、凄まじい炎が吹き降り、地震のような音と揺れがしましたが、武蔵が「おのれ妖怪、退治してやる」と腰の刀に手をかけると、し〜んと静まり返りました。

4階でも同じことが起こりましたが、武蔵が構わず最上階まで登ると、あたりは静まり返ったまま。ならば現れるまで待とうと腰を下ろし、うとうとしていると、美しい姫が現れ「私は姫路城の守り神、刑部明神じゃ。近頃、妖怪が住み着き人々を脅かすので退治したいと思っていた。そなたが来てくれたので、妖怪は恐れをなして退散したようだ。

よって褒美に宝剣を取らす」といって姿を消し、武蔵の前には白木の箱に入った名刀が残されていたということです。



大天守最上階の刑部神社



15. 領民の怨念？妖怪に悩まされた輝政

姫路城の天守が完成し、一段落ついた慶長14年（1609）、城内で不思議な手紙が発見されます。城主の池田輝政に宛てたもので「輝政と夫人には以前から天狗が取りついて、呪いをかけようとしている。命が惜しければ城の鬼門に八天塔を建て、高僧による祈祷などを行え」という奇妙な内容でした。

これについて領民が、「秀吉がお城を築くために姫山にあった刑部神社を総社に移したあたりだ」と噂しあったので、輝政は刑部神社を城内の「とノ三門」内にうつして祀ります。

ところが2年後の慶長16年、輝政は重い病気で倒れてしまいます。そこで今度は手紙に書いてあった通りに天守で加持祈祷を行い、八天塔を刑部神社の横に建てたところ、病状はいったん回復しますが、喜びもつかの間、八天塔建立の翌年の慶長18年に輝政は病死。その後、子供たちも相次いで若死にしています。

何とも奇怪な話ですが、その背景には輝政が行った年貢の2割打ち出し（2割増の徴収）などの苛酷な領国支配があり、領民たちのうらみが歪んだ形であらわれたのではないかと考えられています。



長壁神社跡の碑（寛延元年（1748）に刑部を長壁に改めた）

16. 姫路城下の実話をもとに…お夏と清十郎

禁じられた恋がもとで男は討ち首、女は狂乱するというショッキングな恋愛事件が姫路城下で起こったのは万治元年（1658）のこと。この事件をヒントに、貞享3年（1686）に井原西鶴が『好色五人女』の第1話「姿姫路清十郎物語」を描き、近松門左衛門が『お夏清十郎五十年忌歌念仏』で取りあげ、日本を代表する悲恋物語として定着していきました。

物語の主人公は城下の中ノ門筋にあったという米問屋但馬屋の娘お夏と、店の奉公人の清十郎。清十郎は室津の造り酒屋の息子でしたが、放蕩が過ぎ、遊女と心中未遂事件を起こして親から勘当され、心を入れ替えて住み込んだのが但馬屋。その清十郎にお夏が想いを寄せ、恋仲になるのですが、身分の違いゆえに二人の仲は許されず、飾磨の港から船で駆け落ちを図るが失敗。しかも運の悪いことに但馬屋の大金紛失の濡れ衣も着せられ、討ち首獄門。清十郎の死後、お夏は狂乱し「清十郎さま殺さば、お夏も殺せ……」と叫びながら悲惨な姿を城下に晒すという話で、野里・慶雲寺に二人の菩提を弔う比翼塚があります。



野里・慶雲寺の比翼塚



17. 昭和の大修理で棟梁が遭遇した人魂

昭和29年（1954）初夏、昭和の大修理のために姫路城にやってきた棟梁^{とうりょう}の和田通夫は連日、自分の身に起こる異変に苦しんだといいます。数百もの光の玉、人魂^{ひとたま}が押し寄せるように近づき、まわりつくのです。

姫路城築城の際に駆^かり出され、事故で亡くなった領民^{おんねん}の怨念^{おんねん}なのか、「このままでは工事で犠牲者^{ぎせいしゃ}が出る」と思った和田は、お祓^{はら}いをするよう工事事務所^{きとう}に何度も頼みますが相手にされません。仕方なく、和田は自分で祈祷^{きとう}することを決意し、夜間立ち入り禁止だった城内に住み込めるよう懇願^{こんがん}しました。

そして、許可^{きょか}を得た和田は城内の小屋に泊まり込み、毎晩、懐中電灯^{ちゅうでんとう}片手に真っ暗闇^{やみ}の天守最上階に登り、刑部神社の前で1時間半、歩き回りながらひたすら読経を行いました。いくつかの経から「力のある言葉」を抜き出した独自の経文で、ひたすら祈祷を続けたのです。

この祈祷が効いたのか、3ヶ月ほどして人魂が減りだし、5ヶ月目になってもはや必要ないと判断してやめたそうですが、棟梁和田の昭和の大修理にかける覚悟の深さが伝わってくる逸話です。



18. 本当にあったの？お殿様専用の抜け道

敵が迫ってきて危機一髪きき いっぱつのとき、お殿様は抜け道を通して……なんて話はドラマでよく目にしますが、果たして姫路城にそんな秘密の通路があったのか、長くナゾとされてきました。

二の丸にあるお菊井戸から帯郭たいかく櫓下やぐらに抜ける穴がある等、抜け穴に関しては幾つか伝説がありましたが、その後の調査によってその存在は否定されています。

では、抜け道はあったのでしょうか？これについては、西の丸の「ワの櫓」の南側、三の丸との境にかつて「鷺山口門さぎやま」と呼ばれる門があり、そこから急な段を下って行くと内濠うちぼりに到達することができました（現在は立ち入り禁止）。つまりこれが抜け道（間道）で、内濠の岸にはいつも小舟がつないであり、城主が側室を住まわせていた西御屋敷に行くときにも利用したといえます。

ただ、舟を使わずとも、内濠には水面から約30cm下に堰堤えんていが隠されていて、じゃぶじゃぶと歩いて渡ることができたという話も伝わっています。さて、真偽しんゐのほどは……？





19. これも抜け穴？ヒミツの「るノ門」

「るノ門」は、三国堀の東南隅から「リの二渡櫓」西面の石垣に達する土塀^{どべい}の下^{した}の石垣の間にひっそりと開かれたヒミツの城門です。

穴門^{あな}と呼ばれる形式の門で、現在は石垣の開口部だけしか残っていませんが、古くは石垣内に柱を立て、冠木^{かふき}を渡して扉^{とびら}を吊^つっていたことが確認されています。

しかも門は、城内側の台地からほぼ1階分切り下げた位置に設けられており、扉も内開きで、いざというときは土砂^{どしゃ}で埋め、門が開かないよう工夫されており、埋門^{うずみもん}とも呼ばれます。

ヒミツの城門と紹介したのは、菱ノ門^{ひし}から入った敵勢には正面に「いノ門」、左手背後に西の丸に向かう坂があるのは見て取れますが、右手は「リの二渡櫓」の石垣しか見えず、そこに門があるとは思えないからです。つまり完全な死角で、本来は「るノ門」から「ぬノ門」に向かうのが天守への近道なのですが、城内の様子を知った者でなければこの門の存在を知らず、あたかも抜け道のようになっているのです。



るノ門

20. 「腹切丸」で本当に切腹をしていたの？

帯の櫓下の穴門をくぐり抜けたところに閉ざされた空間があります。井戸があるので、井戸曲輪くわとっていました。これを「腹切丸はらきりまる」と呼んでいます。

「腹切丸」の南にある帯郭櫓たいかくやぐらは、石打棚いしうちだなと鉄砲狭間てっぽうさまを備え、守りが手薄な城の東南からの敵の攻撃こうげきに備えるものですが、3室に仕切られた1階部分の真ん中の部屋には壁がなく、台状になった石打棚が見通せます。これが検死役人が座る検死台のようにも見え、加えてその前に井戸があり、首を洗うための井戸にも見えることから「切腹」が連想れんそうされたようです。逃げ場のない閉ざされた空間であることも、「切腹」のイメージをふくらませたのかもしれない。

しかしこの場所は天守のすぐ下で、櫓と茶席にも使われた数奇屋風の建物を組み合わせた帯の櫓にも近く、こうした場所で切腹が行われることなどは考えられません。不気味で暗い櫓のイメージから「腹切丸」と呼ばれるようになったと考えられます。



帯郭櫓 (腹切丸)



21. なぜか口を閉じている大天守の鯨たち

棟飾^{むねかざり}に用いられている鯨瓦^{しやちがわら}。鯨は頭^{とら}が虎のごとく、尾ひれがトゲのごとくで、よく鯨^{くじら}を倒し、波を起こし、雨を降らせるという想像上の海魚で、鯨瓦はこれを鉾^{ほこ}のように逆立てているので鯨鉾^{しやちほこ}ともいいます。

火を見ると口から水を吐くとされ、火災^よ除けのまじないとして屋根に置かれています。本来は口を開けているものと閉じているものが一對になっていなければならないのですが、姫路城大天守の11尾の鯨はなぜか口を閉じたものばかりです。

というのは、昭和の大修理の際に、それまでの鯨瓦^{そんしょう}の損傷が激しかったため、西側大千鳥破風^{はふ}に掲げられていた貞享4年銘(1687)の鯨瓦を見本に、すべてを同じ形に復元したのですが、口を閉じている鯨だったため、大天守の鯨がすべて口を閉じているものになってしまったというわけです。

このたびの平成の大修理で最上層の鯨瓦が新調されましたが、これも貞享の鯨瓦の形状を模しており、大天守はこれからもこの鯨たちによって火災から守られていくようです。



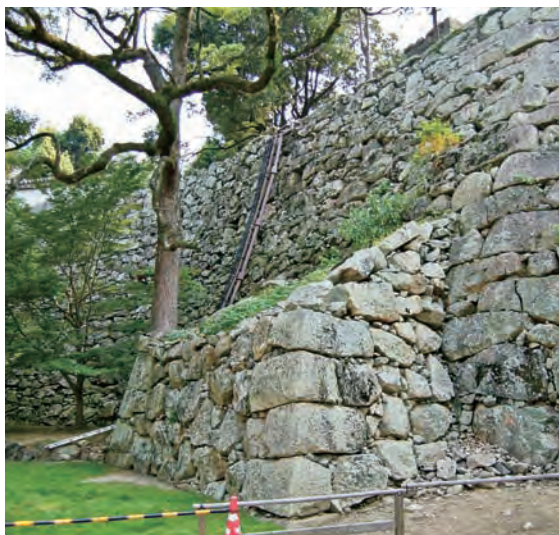
22. 後で補強された「ちょっと変な石垣」

一般的な姫路城の見学ルートは、西の丸経由で「はノ門」を目指すか、「いノ門」から「ろノ門」を抜けて「はノ門」に向かうかのどちらかなので、これまであまり注目されませんでした。平成の大修理で見学ルートが一部変更になったために「ちょっと変な石垣」がにわかに話題になりました。

話題の石垣は、「いノ門」を抜けて右手に曲がり、「ぬノ門」に向かう途中にある、高石垣の外側に張り出した石垣で、高石垣のふくらみを抑えるために後から補強した石ものです。

石垣の修理には幕府の許可がいることや、解体して積み直すには時間も費用もかかることから、こういったふくらみ出した高石垣の前面を別の石垣で押さえ込むような比較的簡単な補強を行うことがあったようです。

この補強石垣がある場所は、石垣の上方に排水口があるので石垣の安定性を欠き、江戸時代の比較的早い時期から石垣のふくらみが生じ、補強石垣によってその後300～400年間持ちこたえてきたと考えられています。





23. 籠城物資を集めていた北腰曲輪

天守閣の北側になる姫山の北辺は原始林の急斜面になっており、その上に高さ約10mの石垣が築かれ、石垣の上には西から東へ櫓が連なっています。



地形に応じて建物が美しいカーブを描き、とりわけ軒の曲線の連なりは優美そのもので、本丸の入口にあたる「ほノ門」をくぐった先にあるこのあたりを総称して「北腰曲輪」と呼んでいます。

二層になった「ホの櫓」を中心に「イ」「ロ」「ハ」「ニ」「ヘ」の各渡櫓で構成されていますが、いずれも籠城のための食糧を貯蔵する建物で、倉庫の役割を担っていました。「ロの渡櫓」内には井戸があり、井戸を拠点に「水ノ一門」から「水ノ六門」を通して天守に水を運ぶ道を形成していました。



「ハ」「ニ」の渡櫓は昭和の大修理の際に塩の塊が発見され、塩を貯蔵していたことが判明してい

ます。心ある城主は万一の場合に備えて貯蔵物資の確認を怠らなかつたようで、名君として知られる榊原忠次が城主だった承応元年（1652）の記録では、3斗入りの俵で1300俵、約6万6300^キの塩が貯蔵されていたことがわかっています。

24. 敵の目を欺く「水ノ一門」から「水ノ三門」の下り坂

頭を打ち付けるほど軒の低い「ほノ門」から本丸に入ると、道は二手に分かれます。北腰曲輪こしくるわの櫓やぐらに沿ってまっすぐ東に進む道と、「水ノ一門」から南へ「水ノ二門」「水ノ三門」と水曲輪を進んでいく道で、天守に向かうにはこの水曲輪を進む方が早道なのですが、敵兵にそうとは気づかれないう、巧妙な仕掛けこうみょう し かが施ほどこされています。

1つは、「水ノ一門」が油壁あぶらかべと呼ばれる築地塀つじ じ べいにさえぎられて、見えにくくしてあることで、一気に「ほノ門」を入った敵兵は、「水ノ一門」に気づかずに行き過ぎてしまう可能性があります。

もう1つは、「水ノ一門」から「水ノ二門」、「水ノ三門」への道が下り坂になっていることです。天守閣は通常、城の中の最も高い場所に築かれており、敵兵からすれば「天守に攻め上がる」という固定観念てい がい ねんがあるので、大天守を目前にしながら下っていくことに「道を間違えたのではないか？」と疑い、遠回りになる北腰曲輪に沿う道を選んでしまうというわけです。これを「惑的多端の縄張り」というのだそうです。



水ノ二門からの下り坂



25. 「姫山原始林」樹木にも戦略的な意図が

天守閣の北東部から西の丸南端までの内濠^{うちぼり}の内側^{はば}、幅30～50m、長さ700mにわたって、うっそうと木々が生い茂る樹林帯^{おしげじゅりんたい}があります。西の丸や北腰曲輪^{こしくるわやぐら}の櫓群と同様、姫路城の北西部の備え^{そなえ}の不十分なところを補うために置かれたもので、姫山原始林と呼ばれています。

この原始林は樹木の影^{かげ}が濃密^{のうみつ}なだけでなく、地形的にも陰^{けわ}しく、その角度は約45～60度という急傾斜^{けいしゃ}で、傾斜面は20～30mもあり、ふもとは内濠に落ち込んでいるため、敵兵もなかなかよじ登れない構造になっています。

昭和44年（1969）の調査によると、原始林には61科143種類の植物が存在していましたが、圧倒的に多かったのがタラヨウの木でした。

その昔にはタラヨウの葉を茶の代用に使っていたこともあります。が、何よりもタラヨウが常緑^{じょうりょく}で、葉が厚くて^{あつ}燃えにくいことから、防火対策として意図的に植栽^{しょくさい}されたのではないかとされています。



26. 鬼門の石垣にはこんな不思議が……

姫路城を見学していると、石垣の一角に奇妙な箇所を見つけることがあります。たとえば、「への渡櫓^{わたりやぐら}」裏手の石垣で、明らかに隅（角）の部分が意図的に切り落とされています。これは鬼（邪氣^{じゃき}）の侵入を防ぐための細工で、「鬼門除けの隅落とし」と呼ばれるものです。

日本では昔、方位は十二支からとっていました。北を起点に、時計回りに子、丑、寅……という風に当てはめるもので、古来日本では丑寅、つまり東北の方角が鬼門で、そこから鬼に見立てられる邪氣が侵入してくると考えていました。

鬼は虎の皮のパンツをはき牛の角を持っています。だから丑寅で、鬼門というわけで、その反対の方角が申酉。これに戌を加えれば桃太郎の家来たちで、真偽のほどはともかく、彼らが丑寅（鬼）と対峙（退治）しているのだという説もあります。現代人には洒落^{しゃれ}としか受け取れませんが、昔の人たちは真剣^{しんけん}で、鬼の侵入を防ぐために鬼門に神社を建てたり、邪気を払う力があるという南天や桃の木を植えたようです。



「への渡櫓」裏の石垣

ちなみに、「とノー門」には桃果紋鬼瓦が置かれ、同じく本丸の丑寅の方角にある姫路神社裏の内濠の石垣も北東の隅を切り落として鬼門除けになっています。



27. 上山里曲輪で発見！狭間のない土塀

狭間とは天守や櫓、土塀の壁面に開かれた矢や鉄砲を放つための穴のことで、通常は長方形、正方形、三角形、円形をしており、かつては内曲輪だけでも約2千もの狭間があったそうです。

ところが、「ぬノ門」を入った「お菊井戸」がある上山里曲輪の東側と南側の一部の土塀には狭間が見当たりません。どの方角から敵兵が来ても対応できるよう、姫路城には狭間が死角なく穿たれているのですが、なぜかこの部分だけ狭間がないのです。

答えを明かすと、実はこの土塀は本来の姫路城には、存在しなかったのです。

元来、この上山里曲輪の東方の石垣の上には、「リノ門」近く太鼓櫓の南裾から南の櫓を経て、さらに西に折れ曲がる延長110mの間に4棟の渡櫓と隅櫓があったのですが、廃藩以来、傷みがひどかったので、明治43～44年（1910～1911）の修理の際に取り壊されてしまったのです。そして跡地に建物が復元されることはなく、土塀だけが築かれました。当時、姫路城は陸軍の管轄下にあ



り、お金も手間もかかる狭間付きの塀の復元は見送られたのかもしれない。

28. 大正元年、姫路城が初めて一般公開に

開城時間内であれば、今では誰でも自由に姫路城に入ることができますが、姫路城が一般公開されるようになったのは大正元年（1912）のことで、まだ100年ほどしか経っていません。

江戸時代には天守へはもちろんのこと、庶民が城内に入るなど考えられませんでしたし、明治維新後も明治7年（1874）に陸軍歩兵第十連隊が姫路城に入ると、城内はすべて軍用地となり、市民から遠い存在になってしまいました。

姫路城そのものも荒れ果て、腐朽する一方でしたが、『姫路城トリビアンpart.1』でも紹介したように、こうした危機の中で姫路市民が立ち上がり、市民の熱意が国会を動かして明治43年（1910）から「明治の大修理」がスタート。工事終了後も、市民の熱気は収まらず、当時の市長が陸軍省にかけあって「無償貸し下げ」の回答を引き出し、元号が大正と変わったその年の8月1日に、初めて城内の一般公開が行われたのでした。城には播磨内外から大勢の人々が押し寄せ、入城口となった喜斎門には長蛇の列ができたという話です。





29. 奉祝行事に電飾で飾られた姫路城

古写真のコレクションなどで知られる故高橋秀吉さんの著書『姫路城の五十年』の中に、大正天皇の御即位大典記念の奉祝行事として姫路城天守がイルミネーションで飾られたことが出ています。

著書によれば、その頃はよく博覧会などの建築にこうしたイルミネーションを飾ったものだが、城の天守にこのようなものをつけたのは前代未聞、破天荒なことだと記し、「とても手間がかかり、危ない工事だったが、とにかく変わった方法で奉祝をしたものである。しかし、これはとても美しい眺めであり、夜空に城を見るなんて、おそらく昔のサムライはとても見られなかったのに、電気の時代に生まれたおかげで、この時の市民は奉祝期間中毎夜この美観に夢見る心地であった」と続けています。

その一方で高橋さんは「この企ては、あとで考えると、またとても危いことでよく漏電をしなかったことと思う。もしものことだったらそれこそ大変である。これ切りでこの方法で城を飾ることはやめになったからよかった」と結んでいますが、まさに同感です。



30. 数々の映画やドラマのロケ地になった姫路城



「大奥」撮影風景

まもなく始まる平成26年（2014）の大河ドラマ「軍師官兵衛」。これまでに姫路城では数々の映画やドラマの撮影が行われてきました。

古いところでは、姫路出身の阿部知二の小説を映画化した「女の園」。世界のクロサワこと黒澤明

監督がメガホンを取った「影武者」や「乱」などがあり、外国映画ではジェームズ・ボンドが活躍する人気シリーズの第5作「007は二度死ぬ」や「将軍」なども。近年では山田洋次監督の「隠し剣 鬼の爪」、仲間由紀恵主演の「大奥」、妻夫木聡主演の「憑神」、平成23年（2011年）に撮影された岡田准一主演の「天地明察」も忘れられません。

テレビ番組ではすっかりお馴染みになった松平健主演の「暴れん坊将軍」。この作品は城内の「はノ門」に至る坂道でよく撮影され、その結果、別名「将軍坂」と呼び久しまれるようになりました。市川新之助（現・海老蔵）が出演した大河ドラマ「武蔵」も記憶に新しいところです。



「天地明察」撮影風景



31. 今の大手門（桜門）は実は昭和13年の作

見上げるばかりにまっすぐ伸びた左右の鏡柱を軸に、重厚な風格を感じさせる「大手門」。私たちは親しみを込めてそう呼んでいますが、実は昭和13年に新築された門で、正しくは昭和10年代に姫路市が打ち立てた三の丸を中心とする「姫路城趾復旧計画」に基づいて復元された「桜門」です。

この計画は、歩兵第十連隊が^{ほへい}大正14年に^{れんたい}姫路城三の丸から岡山へ転出したことを受けて建てられたもので、三の丸西南の「レの櫓」とその北側の「タの櫓」をも^{ふっこう}復興させようというものでしたが、戦争のために^{まぼろし}幻に終わってしまい、わずかに大手門にあたる桜門だけが復元されました。

姫路城の大手は桜門と桐二門、桐一門の3つの門で^{ます}枳形を構えて防備を固めていましたが、明治7～9年の陸軍の^{へいえい}兵営設置と雨による崩壊で^{ほうかい}撤去され^{てつきよ}ました。復興にあたっては、なぜか本来桐二門のあった位置に桜門の建設が計画され、そのまま現在の大手門（桜門）が建てられています。



32. 今とは様子が違った戦中戦後の内濠

今ではすっかり美しく整備され、不定期ながら姫路藩和船の操船体験や乗船体験ができるようになった姫路城の内濠ですが、戦中戦後は今からはとても想像のつかないような様子だったそうです。

たとえば、昭和20年7月3日の姫路空襲では内濠にも数多くの焼夷弾が落下。濠の水は焼夷弾の熱で蒸発したため水面が泥状化し、焼夷弾の筒が筍のようにあちこちに突き刺さっていたといいます。この筒は外側が頑丈な鉄板だったため、後日拾いあげる人がいて、それらを平板にして「十能」（小型のスコップのような形で、炭や灰を運ぶのに使った）に加工するなど、冬場に欠かせない生活用品として商品化されたそうです。

また、終戦後は食糧難だったため、市内の金魚店が許可を得て、現在の手門から好古園北東角までの濠を養魚地にして、4～5年の間、鯉の養殖を行っていたそうで、土どめして養魚地化した内濠北側の原始林下は陽も差さないため、真冬は氷が張り、子どもらのスケート場になっていたそうです。



- トリビアン協力 姫路城外国語ガイド協会（VEGA）
姫路城シルバー観光ガイド
姫路グッドウィルガイドかしの木会
高谷日出男さん
吉田正久さん
谷川恵一さん（総合文化誌「バンカル」副編集長）
加藤修治さん（（公財）文化財建造物保存技術協会）
堀田浩之さん（兵庫県立歴史博物館）
工藤茂博さん（姫路市立城郭研究室）
姫路城管理事務所
城周辺整備室（姫路城改修担当）
姫路フィルムコミッション



姫路市キャラクター
しろまるひめ

知るほどはまる 姫路城トリビアン Part 2

平成 25 年 11 月発行

編集／姫路市観光交流推進室

発行／姫路市